

■むらた ちあき プロフィール

京都造形芸術大学 客員教授

神戸芸術工科大学 客員教授

九州大学 非常勤講師

株式会社ハーズ実験デザイン研究所 / METAPHYS

代表取締役

**略歴**

1959年鳥取県境港市生まれ。1982年に大阪市立大学工学部応用物理学科卒業後、三洋電機株式会社デザインセンター入社。1986年に株式会社ハーズ実験デザイン研究所を設立、プロダクトを中心に広範囲なデザイン活動を行い、Gマーク金賞をはじめ、DFAグランプリ、RED DOT BEST OF BEST、ジャーマンデザインアワードWINNER賞、iF DESIGN AWARD GOLD、ソーシャルプロダクツアワード大賞など、国内外で150点以上を受賞。またオムロンの血圧計「スポットアーム」(2004年)やマイクロソフト「Xbox 360」(2005年)などを手がけ、世界記録的な販売数量を達成する。自ら立ち上げたブランド共有型コンソーシウムブランドMETAPHYSは、自著「行為のデザイン思考法」で企画・デザインされた商品を、多くの企業と開発から販売までを実践している。また東京都美術館新伝統工芸プロデュース事業(TC&D)や越前ブランドプロダクツコンソーシウム(iiza)、鳥取プロダクツコンソーシウム(TOTT)など、地域振興施策としてデザインを活用したプロデュース業務にも数多く携わる傍ら、eco products design competition 2007~2010、social design conference 2011~2015の開催を通じて「ソーシャルデザイン」という言葉を生み出し、社会性を持ったデザインの啓蒙に尽力している。著書に「ソーシャルデザインの教科書」(生産性出版)、「問題解決に効く行為のデザイン思考法」(CCCメディアハウス)がある。

**主な受賞歴** (通常のGマーク受賞などは省く)

01年 「3方向衝撃加速度計」グッドデザイン賞 金賞受賞

05年 無人航空機「カイトプレーンレスキュー」グッドデザイン賞
中小企業庁長官特別賞受賞/METAPHYS「falce」
中小企業庁長官特別賞受賞、ODC選定グッドデザイン商品年間最優秀賞

07年 METAPHYS「hono」 新日本模様受賞

08年 METAPHYS「viss」ステーションナリオプザイヤー受賞/METAPHYS「uzu」Design for Asia Award ブロンズ賞受賞

09年 METAPHYS「susuki」Design for Asia Award ブロンズ賞受賞

10年 「JAPANBRAND越前打刃物」iFデザイン賞/「ナイフボード」ドイツアンビエンテ・デザインプラス賞受賞/METAPHYS「lucano」Red dot Award・Best of best受賞/METAPHYS「susuki」パリ、メゾンエオブジェ BEST NEW PRODUCT AWARD受賞/METAPHYS「lucano」中小企業庁長官特別賞受賞/釜山デザインセンター、アジアデザイナーアワードで2010アジアデザイナー賞受賞/チタン箸「uqu」Design for Asia Award ゴールド賞受賞

11年 福井県 モバイルビールサーバー「どこ生」新事業フロンティア大賞2011受賞/METAPHYS 鋳製酒器「gekka」Design for Asia Award 2011 シルバー賞受賞

13年 METAPHYS「鋳製重ね酒器 suiu」Design for Asia Award 2013アジアデザイン大賞受賞/METAPHYS「lucano」3ステップ German Design Award WINNER賞受賞

14年 山本金属製作所「回転曲げ疲労試験機 GIGA QUAD」グッドデザイン賞ベスト100、ものづくりデザイン賞のW受賞

15年 METAPHYS「patis」 German Design Award 2015受賞/Medidea 点滴スタンド「feel」 JIDA DESIGN MUSEUM SELECTIONvol.16選定/METAPHYS「lucano ladder」 iF design award 2015受賞/iiza 「和包丁」 iF design award 2015受賞/JAPAN WOOD DESIGN AWARD 2015 ウッドデザイン賞

16年 iiza「研ぎ出しナイフシリーズ」iF design award 2016受賞/「サラヤ プレミアムパワー」 グッドデザイン賞2016受賞/METAPHYSチタン耳かき「elin」 Design for Asia Award 2011 ゴールド賞受賞/METAPHYSベッドサイドライト「cocoh」Design for Asia Award 2011 シルバー賞受賞/METAPHYS 因州和紙時計「fumon」Design for Asia Award 2011 ブロンズ賞受賞

17年 iiza「洋包丁」iF design award 2017ゴールド受賞/「越前プロダクツコンソーシウム」ソーシャルプロダクツアワード2017大賞受賞/「サラヤ プレミアムパワー」2017年ジャパンパッケージングコンペティション(JPC)経済産業省製造産/業局長賞、トップアワードアジア2017のOutstanding In Functionality Award受賞

くならず、両手で注ぐ丁寧なお酌が知的長さを増すことで、片手では注ぎにくくなり、両手で注ぐ丁寧なお酌が知的

るために、2005年に立ち上げたMETAPHYS(メタフィス)ブランドでは、企業を持つコア・コンピタンスに基づき、商品開発を行ってきた。モノの存在意義を1から考え直し、再構築していきます。その原点となる考えが、多摩美術大学で4年間、教えていた「行為のデザイン」です。これは人の行動を最適化するデザインのことを言います。このようにモノだけではなく、仕組みを考えること自体もデザインの領域だと思っています。デザイナーは極力自己を抑えその状況の中にある良さを発掘し整えることが重要です。

例えば、METAPHYSで作った徳利gekka。支点からボトムへの長さを増すことで、片手では注ぎにくくなり、両手で注ぐ丁寧なお酌が知的

るために、2005年に立ち上げたMETAPHYS(メタフィス)ブランドでは、企業を持つコア・コンピタンスに基づき、商品開発を行ってきた。モノの存在意義を1から考え直し、再構築していきます。その原点となる考えが、多摩美術大学で4年間、教えていた「行為のデザイン」です。これは人の行動を最適化するデザインのことを言います。このようにモノだけではなく、仕組みを考えること自体もデザインの領域だと思っています。デザイナーは極力自己を抑えその状況の中にある良さを発掘し整えることが重要です。

京都造形大学のソーシャルデザインインスティテュート(SDI)では、本学舎とは別に会社の地下を学生たちに開放して、社会課題をデザインで解決する方法を実践形式で取り組んでいます。それら課題で一緒にいえることですが、人が集まる集客装置を作ることを念頭においています。やはり経済は、場所を問わず稼働率を上げることで動き出すものです。さまざまな企業から出資のお話をいただ

株式会社ハーズ実験デザイン研究所代表取締役の村田智明氏。京都造形芸術大学ソーシャルデザインインスティテュートの所長も務める氏が提唱する「行為のデザイン」から社会課題を解決する「ソーシャルデザイン」について伺った。

モノとコトのアイコン化で目指すサステナブルなモノづくり

学生時代は大阪市立大学工学部物理学科で、応用物理学を専攻していま

した。デザインは独学です。1982年に三洋電機株式会社デザインセンターに入社し、その4年後の1986年に株式会社ハーズ実験デザイン研究所を設立しました。現在、プロダクトを中心にグラフィック、CI、インターフェースデザイン、デザインプロデュースなどを行っています。

京都造形大学のソーシャルデザインインスティテュート(SDI)では、本学舎とは別に会社の地下を学生たちに開放して、社会課題をデザインで解決する方法を実践形式で取り組んでいます。それら課題で一緒にいえることですが、人が集まる集客装置を作ることを念頭においています。やはり経済は、場所を問わず稼働率を上げることで動き出すものです。さまざまな企業から出資のお話をいただ

でも、きちんとキャッシュフローさせていかなければ持続的な事業が成り立ちません。今、デザイナーがモノをつくるだけの時代は終わりました。さらにモノづくりを中心にした全体のしくみを考えることが求められていると考えられています。その行き過ぎた例として、最近よく「デザイン」の場面で使われる「モノづくり」は否定的に観られ、「コトづくり」寄りの認識が広がりつつあります。しかし、物質社会に生きる私たちはコトづくりだけで営みが持続できるでしょうか。そもそもデザインの言葉の語源には、「記号化」という意味が含まれています。そしてデザイナーにはモノやコトを可視化し、分かりやすい記号に翻訳する能力があると思っています。だから、持続可能な社会を実現するためには、モノを包含するし

らぬ間にできるようになっています。このように「人」がいて「目的」がある時に「目的を達成するための何か」を考えるということが「行為のデザイン」です。広義に解釈すれば、「持続可能な社会」という目的に対して、「目的を達成させるための何か」を考えていくと、その領域は、「ソーシャルデザイン」にまで広がっていると考えるでしょう。その課題抽出やソリューションを論じあう場が、ソーシャルデザインカンファレンスです。その前身の「エコ・プロダクツデザインコンペティション2007」の頃から、企業とデザイナーが協業するコンソーシアムの概念を取り入れていました。実際に企業が出したテーマをもとにデザイナーとマッチングを図り、ソリューションを生み出し商品化へと結びつけていきました。2010年

頃からエコだけでは解決には至らない社会課題も増え、名前を「ソーシャルデザインカンファレンス」と変え、来年で4回目の開催となります。今年は、16年ぶりに定期就航を果たすなど

「観光から関係へ」が結実している瀬戸内国際芸術祭2013「醬十坂手プロジェクト」の事例についてディレクターを務めた椿昇さんをはじめ9人が講演して下さいました。

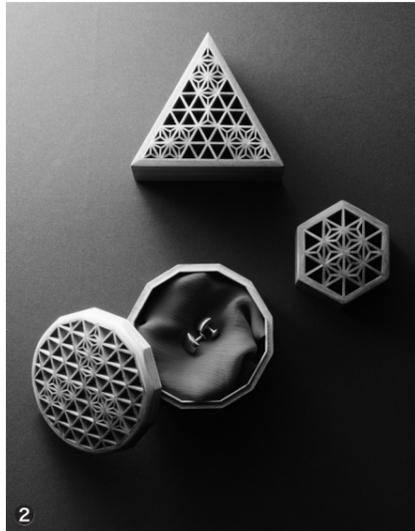
互いの良さを引き出すデザインシンキング

デザインワークで最も大切なパートナー、その共有化は、ワークショップ形式で行っています。参加者全員で情報を共有しあい、自分の中に内在する課題の背景を整理してから、解決を紐解いて

くみに立ち返る必要があります。



## あらゆる課題を「モノ」と「コト」から解決にサステナブルを可能にするソーシャルデザイナー



**ソーシャルデザインの教科書**

1300年間、連続と続く式年遷宮こそ、日本初のソーシャルデザインだ

モノづくり、コトづくりに携わる全ての人が、サステナブル(持続可能な)社会をつくるために、今わたしたちは何をすべきなのか。様々なフィールドから、デザインマインドを持つ関係者の事例を積み重ね、問題を解く。

村田 智明

- ① METAPHYSブランドの徳利「gekka」  
ロクロで挽くという昔ながらの技術で鋳器を製造する大阪鋳器株式会社との伝統性とMETAPHYSデザインのコラボレーションによる作品。
- ② 猪俣美術建具店とともに作った「Kinomo Box」  
蓋に和のアートである「組子」をあしらった小箱。
- ③ (左) ソーシャルデザインカンファレンス2013の会場の様子  
(右) ソーシャルデザインカンファレンス2014の会場の様子
- ④ 『ソーシャルデザインの教科書』村田 智明(生産性出版/2014.5/2,160円)

いきません。すると、結果として誰もが納得できるソリューションができあがります。それはみんなが出した答えの最大公約数なので、その結論には反対意見は出ないのです。そこから「コト」と「モノ」づくりがスタートします。そこに私の主張はなく、代わりにそこに参加した人たちの知恵が詰め込まれています。これが本来のブレデザインの状態ではないかと思っ

へと向かうように導いていくのです。それはまるで料理人のようです。料理人は最高の料理をつくるために旬の野菜や肉、魚など食材を調達するための眼が必要です。そして最高の食材を生かすための調理方法も重要です。食する人が誰か、その人はどういう状況にいるのかによって、調理方法や食材を変更する技量も料理人の腕次第でしょう。まさにデザイナーの仕事も同じだと思います。偏った自我を絡めず、周りの状況を俯瞰することで見えてくる適切なバランスをどう持続的に保てるかにかかってくるのだと思います。

その中で、猪俣美術建具店とともに作った「Kinomo Box」には特別な思い入れがあります。きっかけは公益財団法人にいがた産業創

造機構(NICO)の百年物語で2013、2014年のデザインアドバイザーとしてかわらせていただいたことが始まりです。猪俣美術建具店は、建具の装飾である伝統的な組子を作っている工芸職人の会社です。しかし、時代の流れとともに家の造りも変化し、組子のある家が少なくなってきました。その窮状から脱却するため、その技術を使って組子のコレクションボックスを作りました。精緻な組子装飾は通常平面的な組み付けをしますが、これを回転させて削り落とすことで球面状の立体感をだし、これまでにない製品ができ上がりました。それを欧州のアンビエンテに出品した結果、クリスチャン・ディオールが本店の商品として採用してくれました。灯台下暗しという言葉の通り、私たちは日本の手業の高付加価値に気付かないまま、安い生産手段をアジアに求める傾向があるようです。アルマーニなどの海外のバイヤーが持っている日本の伝統工芸士のプロフィールのよ

うに手業で生まれるモノの本質をしっかりと見る能力があれば、日本の伝統工芸は必ず生き返ると思っています。それこそ、私たちデザイナーが果たすべき役割だと考えています。

また、このようにモノの価値を創出し、持続可能な社会を生み出す地域創生プランニングこそ、「ソーシャルデザイン」だと思っています。そして、20年に1度の伊勢神宮式年遷宮はまさに日本初のソーシャルデザインだと考えられます。その20年というのは、ちょうど親方の元で丁稚が一人前になるまでの期間と合致し、それが遷宮のたびに代々技術が伝承されていきます。それは、今で言う雇用の創出でもあります。さらに遷宮では1万2000本もの木材が使われますが、それをただ廃材として処分するのではなく全国の神宮系列の鳥居やお札として再利用されます。また伐採するだけではなく御柚山へ木々の苗も植えられ、用材の木に成長するまで長年、守り抜いていきます。

そこには戦後日本における政治や社会問題の多くに見受けられる、その場しのぎの打算や妥協はなく、継時的な「グランドデザイン」の考え方がすでに実践されていました。今こそ、個々だけではなく全体で良好な関係を保ちながら、持続させていけるホロニックパスの構築が求められているのではないのでしょうか。